

## 高砂歴史ツアー-1

風光明媚な高砂地域の海岸は、平安時代（794－1185）以前から人びとに知られる人気の場所でした。

1600年、大名の池田輝政（1565－1613）に播磨国姫路藩（現在の兵庫県南西部）の領地が与えられました。姫路藩は、当時の重要品目であり通貨価値のあった米を毎年52万石（7.8トン）生産していたことから、裕福であると考えられていました。藩主の輝政は姫路城やそのほかの場所の建設を命じ、姫路の町を発展させました。高砂地域では、港の開発や加古川を町の中に引き入れる堀川運河の建設などで、高砂地域の発展に主導的な役割を果たしました。

江戸時代（1603－1867）、高砂地域は姫路藩で最も重要な町のひとつでした。立地や、活発な漁業、米生産などの条件揃っていたため、加古川を通じて運ばれる物資の流通拠点として栄えたのです。

### 百間蔵

1605年、高砂に2棟の蔵が建てられ、全長約100間（間は昔の長さの単位で今の182メートル相当）であることから、「百間蔵」と呼ばれるようになりました。加古川を下る物資はすべて高砂地域に運ばれ、蔵は姫路藩の財産や播磨地方の北部と東部から徴収した年貢米を保管する場所となりました。当初から500万キロ近くの米を貯蔵できましたが、江戸時代末期には容量が約600万キロまで拡張されました。

その歴史を刻んだ石碑が今、蔵の跡地に建っています。

### 川口御番所跡

1605年頃、輝政は高砂港の入口に川口御番所を建てるよう命じました。この番所は姫路藩の直轄で、高砂港に入港する貨物船や海上交通の監視のため、役人が配置されました。役人2名と常勤警備員5名が昼夜交代で勤務しました。

池田家の家紋入りの瓦が目印です。

## 高砂や

池田輝政は手工芸品の生産を奨励しました。輝政の庇護を受けて、地元の職人であった尾崎庄兵衛は、絹の着物を装飾するための二重型染め技法を考案しました。この技法は、高砂神社の「相生の松」や、その2本の松の精霊で、夫婦円満と長寿を象徴する老夫婦の伝説「尉と姥」を文様化するのに用いられました。江戸時代、この染色技法は「高砂染」と呼ばれて珍重され、完成した染め物は将軍に献上されました。

明治時代（1868–1912）になると、絹よりも木綿が使われるようになりました。その後、大正時代（1912–1926）頃になると、コストや手間を削減できる染色方法が導入され、高砂染は衰退しました。その後、昭和時代（1926–1989）に入り高砂染はほぼ廃れてしまいました。

しかし21世紀に入ると、高砂染を復活させるためのワークショップなどが始まり、再び高砂染が注目されるようになりました。鍛冶屋町の尾崎家住宅（高砂や）前には、高砂染発祥の地であることを示す看板が立っています。

## 延命寺の織部灯籠

大名で茶人でもあった古田織部（1544–1615）が考案した織部灯籠。花崗岩で作られ、上部は十字に、下部の脚が大きく離れています。江戸時代、織部灯籠は茶室の庭に置かれました。

灯籠は奉納用、照明用、観賞用など、用途はさまざまであったと考えられます。十字架をモチーフにしていることからキリスト教が厳禁とされていた当時では、江戸時代のキリスト教徒が密かに礼拝に使っていたのではないかと考えられ、キリシタン（キリスト教徒の）灯籠とも呼ばれています。

## 川地蔵

川地蔵坐像は、航海安全の神である焼火大権現を表しています。島根県の隠岐諸島に伝わるもので、船主の海上安全を祈願して設置されたといわれています。

2015年には歴史的価値のある地域財産として、高砂市ふるさと文化財に登録され、2020年には現在の場所に移動し地蔵を納めるための建物が建てられました。現在も地元住民が供養や祈りを捧げ

ています。